

介護老人保健施設ライフサポートひなた

症例概要 利用者 :90歳代 男性 介護度4

病名: 腰椎圧迫骨折 高血圧 アルツハイマー型認知症(Ⅲa)

利用サービス: 入所

経緯: 令和3年12月に自転車で転倒し、腰椎圧迫骨折受傷。高齢の為保存療法となり疼痛コントロールで入院加療後、リハビリ目的で当施設へ令和4年4月入所

内 容

入所時は、腰部圧迫骨折の為、終日コルセット装着し、車いす対応で自発的な動きは少なく、日中もベッド上で過ごすことがほとんどだった。

意思疎通は出来るものの、自発的な発語はほとんど聞かれず、レクリエーションへの参加なども、促しても拒否が続き、食事以外はベッド上にいることが多かった。腰部圧迫骨折の為、終日コルセットをしていたが、痛みの訴えもなく、医師確認の元、入所後2ヶ月ほどでOFFとなり、その後も痛みの訴えなく経過していたがリハビリは積極的ではなく、時々拒否もみられた。

ご家族を含めたカンファレンスにて、伝い歩きで歩行が可能になれば自宅に帰る事も可能の方針となり、ご自宅へ家屋調査に伺い、手すりなど住宅改修することとなった。それからというものリハビリ内容も、歩行器による歩行訓練へと進み、居室や食堂から介護や看護師付き添いの下、トイレまでの歩行器歩行や手すりを使った歩行練習等が始まった。ご本人も在宅に戻れるという意識が芽生え、歩行訓練も積極的になり拒否がなくなる。同時に、日中食堂で過ごす時間も増え始め、口腔体操や、レクリエーションも参加するようになってきた。

また、息子さんを探したり、「農協の互助会はどうなっている?」など、在宅に関する会話も聞かれ始めた。食事も、粥から軟飯、副食も1口大へと変更し問題なく摂取していた。ご本人はご自宅に帰れるという明確な目標が出来たことで、在宅へのイメージが沸き、日常生活活動の積極性や、それに関する発言が増えていったのではないかと考えられた。目標を達成され、笑顔で在宅に戻られた。その後、訪問リハビリで様子を伺ったところ、穏やかに在宅生活を過ごされている。在宅復帰までには、ご家族の協力はもとより、リハビリをはじめとした多職種で協働し、ご本人の家に帰りたい思いを支援することで現実となり、介護保険施設の本来の目標の在宅復帰が可能になった事例であった。今後も、多職種が協働し、利用者さんの求めているバリューを提供し続けていきたいと思う。